



長持ちす
る夢



川崎ゆきお

あるイメージが人を動かす。

あるイメージがなくなると動きにくくなる。

どこへ向かっていいのかがわからなくなるからだ。

決してそれで迷うのではなく、逆にあるイメージがあるときこそ迷っているともいえる。だから、あるイメージがなくなると、夢から覚めたような状態になる。

吉村は今、そんな状態だ。

つまり、目的を失ってしまったのだ。

そういうとき、決まって訪ねる友達がいる。

そして、実行した。

「また、あれかい」

「ああ、あれだよ」

友達はまだ知っている。吉村の精神状態を。

そんなことでもない限りやってこないからだ。

「いつもいるとは限らないんだけどね」

「でも、いつもいるねえ」

そういいながら、いつもの椅子に腰掛ける。この椅子も四年前に来た時と同じ場所にある。

「迷い病だろ」

先に友達が話しかける。

「何か、よくわからなくなったんだ」

吉村は夢から覚めたことを伝えた。

「もう、どうでもよいことのように思えて……」

「まともになったんだよ」

「いや、目的喪失だよ」

「悪い夢を見ていたんだよ。おめでとう」

「めでたいものか。やる事がなくなってしょんぼりだよ」

「目的を持ち、夢を追いかけることが異常なんじゃない」

「どうして？ それって、ふつうじゃないか」

「確かにそれで、目的はできるけど、これは曖昧でしっかりしていないと思うんだ」

「ちゃんと計画性を持ってやったよ」

「目的が先にあり、その過程に計画性を持つ。当然の話だ」

「そうだろ、ノーマルな行為じゃないか」

「しかし、目的って、なんだい」

「やりたいことじゃないか」

「それは、吉村君が勝手に思い描いた世界でしょ。だから夢のようなものなんだよ。従って土台が脆い」

「でも、目的がなければ、なにをすればいいのか、わからなくなるじゃないか」

「それで今、わからなくなったんだ」

「そうだよ」

「僕のせいじゃないからね」

「わかってる。自分が描いた夢なんだ。だけど、それが醒めてしまった」

「何かあったの？」

「ある日突然、原因もなく」

「だから、土台が脆いと言ったじゃないか」

「そうだけど」

「じゃ、また目的、夢を持てばいいじゃないか」

「今度は、どんな夢がいいかなあ」

「前回相談を受けてから四年になるでしょ。四年持ったんだからロングセラーだよ」

「もっと長持ちする夢を教えてくれよ」

「ねえ、吉村君。夢は自分で見るものでしょ。君の中から立ちのぼってくるネタじゃないとだめなんだよ」

「それがないから毎回聞きに来てるんじゃないか」

その友達は、新ネタを披露した。

吉村は急に活気づいた。元気が出た。

「よし、それで行く」

吉村はまた、夢を与えられ、夢の中に入れたようだ。

了